

古事記読書会「弥栄(いやさか)の会」第4回 報告書

開催日 第4土曜日 2019年1月26日(土) 9時半～12時

開催場所 中日本建設コンサルタント(株) 東京支社会議室(四ツ谷)

参加者 7名(会員5名、サポーター1名、会員のご家族1名)

内 容

(1)参加者自己紹介

(2)本日の朗読の進め方(リーダー)

今回は順番どおり第三集「少彦名(すくなさま)」を味わいます。内容としては、第六章すくなさま、第七章おまつり、に加えて、編者である栗山先生が書かれた「改編に際して」までを一気に読みます。栗山先生は阿部先生のお弟子さんで、第一集～第二集までをわかりやすくまとめてあります。

(3)朗読

阿部國治著・栗山要編「新釈古事記伝 第3集 少彦名」を車座になり全員で順番に輪読。約2時間余り、節ごとに交代しながら休憩なしで通して読んだ。

(4)読後感

○本当に考えさせられる内容でした。少彦名の本の帯に「他人の命の発展になるような仕事をして、それによって褒めてもらったり、名誉をもらったりしないようにしなければ、せつかくのよい仕事も、本当の良い仕事にはならないものだ」ということが、力強く主張されているのが「少彦名」の物語を一貫して流れているところの姿であります。」とありまして、ここだけ読んでも、また大和魂について考えさせられました。

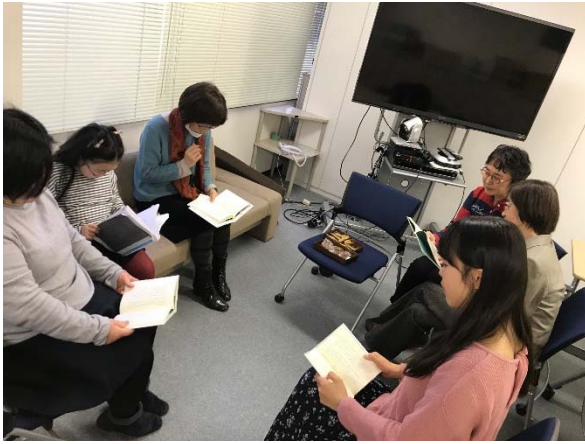
○「すくなさま」のように、極小なこと(もの)を信じることにより、自分の力が極大になるということを学びました。まずは、極小なことに気づくことが大切だと思いました。

「すくなさま」の持っている徳と光が「おひかり」で、自分の中に「おひかり」を発見することを学びました。また、安全の中に「おひかり」があるという部分は、実感として納得できました。挨拶も、人とのつきあいも「おひかり」であり、日常的に「おひかり」が見いだせる現場が、安全を確保することなのかと思いました。

日頃、目先のことや理屈で考えて、イライラしてしまうことがありますが、そんなときは、今日の朗読を思い起こして、「すくなさま」を見つけ、自分の心に「おひかり」を発見したいです。

○大きな災害が起きるたびに「すくなさま」「おひかり」を大事にできる日本人を誇らしく思います。名もなき土木技術者の仕事は、まさに、「すくなさま」の仕事でなければならず、それぞれの心に「おひかり」があって良いものを後世に残せると思います。

○世のため人のために何かをするのであれば、人知れずやらなければならない、ということですが、たとえ良いことをしても、恩着せがましくなれば、恩を受けた側もうっとおしい気持ちが出てきてしまいますし、却って辛くなるのかもしれない。奥が深いです。今回も少彦名という不思議な神様が登場しました。大国主命はなんとかこの神様のようになりたいと思うのですが、大切なことは自分の内にあることに気が付き、信仰心が出てくるんですね。ふと思ったのですが、お祭りは「祀る」から来ているのかもしれない。私自身、信仰しているものはありませんが、難問に直面したときは、自分自身の内側にある気持ちをじっくり見つめてみようと思いました。



輪読の様子

次回予定 2019年2月23日(土)9時半～12時@中日本建設コンサルタント(株)会議室
今回は順番どおり「第四集 受け日(うけひ)」を味わいたと思います。

以上